



理解し、考え、判断しながら 英語を使う授業

渡邊時夫 Watanabe Tokio

英語を教える場合に、誰もが一度は考える指導法がある。まず、重要と思われる文や構文を何度も繰り返し口ずさんでしっかり記憶させる。やがて記憶できた文の数が増え、英語のいわば貯水池ができる。そうすれば、必要に応じてその貯水池から適切な文を選び出しさえすれば生徒は自由にコミュニケーションができる、という考え方である。例えば、*The news made them happy.* を目標文とすると、*substitution, expansion, transformation* などの drill を通して多様な文を大量に生産し、貯水池を豊かにすることができる。このようにして蓄積された英語の貯水池は、コミュニケーション能力の基礎・基本の重要な一部であると言えよう。ただ、この種の drill は、機械的な活動になりやすく、大半の時間をこれにあてるような指導は再考しなければならない。

生徒が自ら考え、判断しなければならないような英語の場面を提供し、それぞれの生徒が独自の *ideas* や *feelings* を明確化していく *teaching process* を確保したいものである。機械的な drill を重ねて、*The news made them happy.* を体得した生徒に、原爆に関わる次の対話を与えたい。

A: The atomic bomb killed tens of thousands of people in a moment.

B: Unbelievable! (1) That makes me sad.

A: You must know the power of the bomb.

B: I think (2) peace is important.

下線部 (1) に触れることによって、*That makes me angry (shocked / sorry / unhappy / mad / surprised).* など感情レベルの体験をさせたり、下線部 (2) について、自分の思いとぴたりした表現を次のうちから選ばせるなどの活動を日常化したい。
(a) war is terrible (b) the atomic bomb is different

from other bombs (c) we must avoid war まずは、これらの英文を生徒に要求することはせず、教師が創作し、生徒にインプットすることが望ましい。そのような活動のあとに、「表現したい気持ち」を発表させたらどうだろう。*War makes nobody happy. , Weapons make everybody miserable. , We must remember the words "No more Hiroshima."* など様々な主張が予測できる。「日本の生徒は、なかなか発言したがない」ことも事実だが、教室で意味のないことや、言いたくないことを言われる場面が多すぎるのではないか。言いたいことを表現する機会を増やすことと、表現力の基礎には理解力という基盤が必要であること、を忘れてはならない。

英語を使う力を習得するためには、話す練習に加えて、たくさんの英語に触れ、考え、理解する機会が豊かに与えられることが必要なのである。生徒は、英語を聞いて理解することの魅力を恒常的に体験できるし、1つのメッセージを表すのに多様な発想や表現があることを無意識のうちに学びとることができる。生徒が持っているこの *implicit learning* の力を意識的に活用しなければならない。教師の「英語を創造的に使う能力」が求められていると同時に、生徒が啓発され、深く考え、意見を発表したくなるような内容の教材が求められている。新しい *NEW CROWN* は、まさに、このことに全力を注いだのである。

わたなべ ときお

清泉女学院大学教授。中部地区英語教育学会会長。小学校英語教育学会会長。全国英語教育学会副会長。著書に『英語が使える日本人の育成—MERRIER Approach のすゝめ』（三省堂）ほか多数。

英語を「使う」ために

根岸雅史 (東京外国語大学)

1. 学年を通した言語活動の配置と構成
ー学年ごとの目標の明確化ー

まずは、2006（平成18）年度版 *NEW CROWN* の言語活動の配置と構成について、全学年を通して見ていく。活動の中心は、1年では、「自分のことや自分の気持ちを説明すること」および「身の回りのできごとを説明すること」、2年では「事実を報告すること」および「物事についての判断をすること」、3年では「様々な考えや意見を述べること」となっている。これらは英語力の発達段階や中学生の興味を考慮して段階的に構成されたものである。

各課の後半に用意されている DO IT は場面と機能を結び付けたコミュニケーション活動のセクションであり、LISTEN / TALK / WRITE という活動から成る。ここでは、スペースの関係もあるので、LISTEN と WRITE の構成を見てみよう。まず、LISTEN は次のような具合である。

	目標	活動例
1年	初歩的な英語の情報を正しく聞き取る	「ALT や友だちの自己紹介」や「留守番電話のメッセージ」などの聞き取り
2年	初歩的な英語を、場面や状況に応じて適切に聞く	「ニュース放送」や「案内放送」などの聞き取り
3年	話し手の意向を理解したり、理解できない部分を推測で補ったりしながら聞く	「物語」や「インタビューのやり取り」などの聞き取り

DO IT の WRITE は年間に2度ほどのやや大掛かりなタスクとなっている。これも順に見ていくと、1年では、「自己紹介をしよう」、「カードを書こう」、2年では「将来の夢は日本語教師です」、「ホストファミリーへのEメール」、3年では「『扇子』を説明してみよう」、「一番の思い出は？」と展開している。また、このようなやや大掛かりなタスクもその中でステップを踏んでおり、STEP 1 は「モデル文を参考に、どのようなことを書くかを考える」段階、STEP 2 は「モデル文の下線部を自分のことにかえて書く」段階となっている。また、「選択的な学習」として TRY が用意されている。

このような段階的な構成は、いわゆる本文にも反映されている。たとえば、1年3課や7課の Show and Tell に始まった活動は、2年5課の Speech に引き継がれ、そして、3年5課の Presentation に発展している。また、内容的にも、調べ学習は、2年7課（How Can We Find Out? 「ヒート・アイランドについて調べました」）から3年5課（Places to Go, Things to Do 「あなたはどこへ行きたいですか？」）へと発展している。

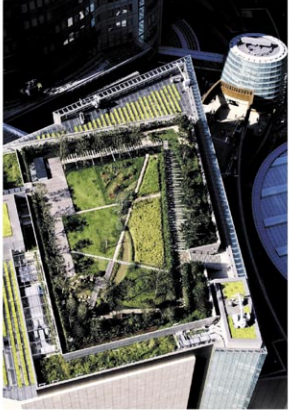
2. レッソンの構成

ープレ活動からDO IT へー

2-1. プレ活動

ここでは、標準的なレッスンの構成を説明する。まず、レッスンの本文に入る前には、プレ活動がある。これは、本文の内容に関連のある写真などを見せることで、いわゆるスキーマを活性化することになる。スキーマを活性化するのは、生徒があらかじめ持っている背景的知識を本文に入ったときに自然に利用できるように準備しておくことである。この

LESSON 7 How Can We Find Out?



What do you see in this picture?
Is the building different from other buildings?

sixty-one 61

基本的な役割がスキーマの活性化であるが、それ以外にも、これによりトピック関連語句の復習をしておくことにもなる。ここでの活動形態としては、教師による Oral Introduction や Oral Interaction が考えられるが、指導用の CD にも Oral Introduction が用意されている。なお、これらの活動は、写真や絵などがあることでかなりやりやすいはずである。このような準備を行ったあとで、本文に入ることになる。

ここでは、2 年 7 課の How Can We Find Out? のプレ活動を見てみよう。このレッスンの扉ページには上のような写真が掲載されている。その下には、次のような質問が投げかけられている。

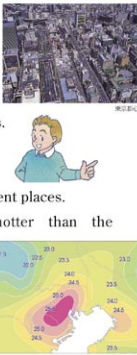
- What do you see in this picture?
- Is the building different from other buildings?

授業では、このような質問を教師が生徒に直接投げかけてもいいし、CD のプレ活動部分の音声を聞かせてもいいだろう。録音されている音声は次のようなものである。

Look at this picture. It is a beautiful park. Rice is growing in it. Trees are grown in it. Do you see something strange about the park?
Yes. It is on a building. But, why is there a

久美とポールは課題研究に取り組むことになりました。テーマを決めてから、どのように調べればよいのか、いっしょに考えてみましょう。

① Paul: What will we study for our school project?
Kumi: How about heat islands?
Paul: Heat islands?
Kumi: Yes. Hot places, like cities.
Paul: What?
Kumi: Look at this. It shows the temperatures of different places.
Paul: Wow. The city is hotter than the countryside. Why?
Kumi: Let's do research and find out.



2003 年 7 月 4 日午後 5 時、東京近郊の気温分布 (東京近郊 3 都市、三上良雄教授提供)

★ POINT
My pencil is long.
My pencil is longer than yours.

● ①②の絵をそれぞれ読んでみる

CHECK IT ①聞いてみよう ②話してみよう

find	project	heat island	hot city	show	than	research
[faɪnd]	[prɒdʒekt]	[hi:t]	[ho:t]	[ʃəʊ]	[ðən]	[ri:ʃəs]

heat islands	ノート	アイランド	温度	temperature	驚き	Wow. F-a-a-
[hi:t aɪlənz]				[ˈtemperətʃə]		[waʊ]

② countryside 都市や町から離れた場所
[kaʊntriːsaɪd]

62 sixty-two

park on a building? Why are rice and trees growing on a building?

もちろん教師自身が問いかける場合は、これが内容への Oral Introduction や Oral Interaction となる。

このような活動を通して、生徒は自分も今までにこのような屋上を見たことがあることや、このような屋上は地球温暖化防止のための工夫のひとつであることなどを思い出すかもしれない。また、こうした具体的な知識や経験を持たない場合でも、このような光景を不思議に思ったりするだけでも、本文を読む準備は十分にできていると考えられる。

2-2. CHECK IT

本文に入ったところには、各セクションのターゲットとなる文型が用意されている。このキー・センテンスは CHECK IT において利用され、その内容は星印のついた絵で示されている。CHECK IT の「①聞いてみよう」では、まず英文を聞いて内容に合った絵を選ぶことになる。ここで聞き取る文は、新出文法事項を除きすべて既習のものである。このため、新出文法事項の意味を既習語と絵を手がかりに推測することができるようになっている。

こうして意味を確認したあとの「②話してみよ

USE IT 7

世界の都市の気温について話そう

下の表は、世界のさまざまな都市の各月の平均気温を表したものです。

都市名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
東京 (Tokyo)	5.8	6.1	8.9	14.4	18.7	21.9	25.4	27.1	23.5	18.2	13.0	8.4
ニューヨーク (New York)	0.3	1.5	5.6	11.2	16.9	21.9	25.0	24.3	20.2	14.2	8.6	3.2
シドニー (Sydney)	22.8	22.9	21.5	18.6	15.9	13.0	12.2	13.3	15.7	18.0	19.6	21.9
モスクワ (Moscow)	-7.5	-4.7	-1.4	6.4	12.8	17.1	18.4	16.5	10.8	5.0	-1.0	-5.5
カイロ (Cairo)	14.0	15.2	17.6	21.9	24.7	27.4	28.0	27.9	26.4	24.0	19.1	15.0
ソウル (Seoul)	-2.5	-0.3	5.4	12.2	17.5	22.0	25.0	25.5	20.9	14.5	7.0	0.3
ロンドン (London)	4.4	4.4	6.4	8.2	11.6	14.5	17.1	16.8	13.9	10.7	7.0	5.3

(1971～2000年の平均気温 気象庁による)

1 2つの都市を比べてみよう

上の表から各都市の月ごとの平均気温を比較して、hot や cold などを使って言ってみよう。

⑫ Tokyo is hotter than London in August.

2 平均気温の高い都市は？

月ごとの各都市の平均気温を比較して、どの都市の平均気温が最も高いかを、例にならって言ってみよう。

⑬ Sydney is the hottest in January.

3 人気のある月はいつかな？

[1] 各都市の平均気温を見て、その情報をもとに、何月が最も海外からの旅行者に人気があるか予想して言ってみよう。

⑭ I think May is the most popular month for visiting Tokyo.

[2] 次に、旅行会社の案内を聞いて、自分の予定と合っているかチェックしてみよう。

都市名	自分の予定	実際に人気がある月	チェック欄
東京			
ニューヨーク			
シドニー			
ロンドン			

66 sixty-six

4 平均気温が同じくらいなのは？

月ごとの平均気温で、東京の平均気温がどの都市の平均気温と同じくらいかを、例にならって言ってみよう。

⑮ Seoul is about as hot as Tokyo in July.

THINK ABOUT IT

久米とポールは、ヒート・アイランド現象についてどのように話したか、書いてみよう。また、もしあなたがこの調査をするとしたらどんな調べ方をするか考えて書いてみよう。

1

2

自分：

SOUNDS

the は通称は強く発音されます。次の各文の the に注意して、読んでみよう。

The city is hotter than the countryside.

The city is the hottest of the three.

The Internet is great.

sixty-seven 67

う」には、いわゆる文型練習が用意されている。ここでは、キー・センテンスをリピートしたあとで、入れかえる単語が cue として流れてくるので、その部分を入れかえることになる。ただし、この文型練習は従来の機械的なものとは異なり、絵があるために、文の意味を考えての発話練習となっている。したがって、この練習には、パターン・プラクティスに対して以前あったような「意味もわからずただ口を動かしているだけ」というような批判はあたらないのである。

近年ともすれば「通じればいい」というような授業を見かけることがある。しかし、基礎のないところで、応用練習ばかりしていても力は伸びていかないのである。ここでの練習は、野球で言えば、素振りやトス・バッティングにあたる。「型」を意識して、それが自然とできるようになるまで練習するのである。今後は、このような口頭練習で、基本文型の定着を図っていくことが重要である。

2-3. USE IT

こうして築いた基礎の上に、教科書本文のあとには USE IT での練習が用意されている。USE IT の活動は、すべて各セクションおよび CHECK IT に対応している。CHECK IT で言語形式 (language

form) の訓練を行うことにしたことで、USE IT ではより言語使用 (language use) または意味に重点が置かれたタスクを作成することができ、その結果、その2つの役割が明確になった。USE IT では、文脈が用意されており、基本的には生徒が自分で話す内容を決定したり、必要な情報を聞き取ったりするようになっている。とりわけ、話すことにおいては、なるべく自己表現となるようなタスクが設定されている。さらに、対話型のタスクもここに多く用意されている。

引き続き2年7課の USE IT を見てみよう。この課の USE IT は、1つの表をすべての活動に用いるようになっている点が、他のレッスンと異なるが、それ以外の基本的な作成の原則は同じである。

話す活動である1では、表を見ながら、生徒が自分で選んだ2都市の特定の月の平均気温を比較して、その内容を英語で言ってみることになっている。たとえば、表の中のシドニーとカイロの1月の平均気温を比べて、

Sydney is hotter than Cairo in January.

というように言うのである。ここでは、比較級を使うという枠はあるものの、意味のある文脈の中でそのタスクを行うことになる。また、聞くことを中心とした3[2]では、情報を聞き取ってメモをとる

活動になっている。ここでは単に情報を聞き取るだけでなく、自分の予想とのマッチングを行うので、生徒は積極的に聞くことが期待される。スクリプトは次のようになっている。

Hello, everyone. Travel experts will tell us about some popular places to visit. We'll hear about Tokyo, New York, Sydney, and London.

Come to Tokyo. April is the most popular month for visiting Tokyo. It's sometimes cold in April. But you can enjoy looking at *sakura*, or cherry blossoms. They're beautiful.

New York is (以下略)

2-4. THINK ABOUT IT

USE IT のあとには、本文の内容を振り返る THINK ABOUT IT が用意されている。英語学習を単なる英語の知識や技能の習得に終わらせないためにも、本文のメッセージについて考える場として、ここは重要である。2年7課では、「久美とポールは、ヒート・アイランド現象についてどのように調べたか、書いてみよう。また、もしあなたがこの調査をしたらどんな調べ方をするか考えて書いてみよう。」となっている。ここでは、生徒は単に内容を振り返るだけでなく、積極的に考えることになる。

2-5. DO IT

最後の DO IT では、内容的に本文とゆるやかな関連を持たせながら、特定の言語機能や表現に焦点をあてたタスクが用意されている。また、ここでは言語機能や表現は新しい学習事項であるが、それ以外は既習事項が用いられており、これまでに生徒が学んだ知識を統合して行う活動となっている。そのタスクは TALK / LISTEN / WRITE の3つがあるが、とりわけリスニングの活動を大幅に増強している。

2年7課に続く TALK 6 では、部屋が寒いので窓を閉めてもらうように依頼する表現とその答えを扱っている。

Ken: Will you close it?

Ratna: Sure. / I'm sorry. I can't. I'm busy now.

また、LISTEN 6 では、本文の内容である「調査」に絡め、アンケート調査について聞き取ることにになっている。

2年 DO IT - LISTEN 6

DO IT

LISTEN 6

アンケート調査

ジャックは、クラスでアンケート調査をしています。

STEP 1 会話を聞いて、下の表にメモをとろう。

name	
favorite subject	
difficult subject	

STEP 2 発表を聞いて、下のグラフの a-f に適する教科名を書き入れ、グラフを完成させよう。

グラフ 1: the most popular subjects

グラフ 2: the most difficult subjects

subject : English science Japanese PE music

70 seventy

3. 縦糸と横糸

各レッスンは、目標とする言語材料や題材が確実に身につくような構成となっている。それは、決して単なる練習の羅列ではなく、有機的に結びついた積み上げになっているのである。これはいわば横糸であるが、縦糸にあたるのが、1年から3年までの3年間を見通した構成である。文法を中心としたシラバスである中学校教科書の場合、一度出てきた言語材料がなかなか次に出てこないというケースが少なくないが、この教科書では、1年ごとにさまざまな言語活動が積み上がるようになっている。こうして積み上がっていく中で、既習の言語材料を統合的に繰り返し使うように設計されている。縦糸と横糸でしっかりと編まれた英語の基礎力が **NEW CROWN** の提供する英語力と言えるだろう。

特集 英語を使う技能の育成

インプット(リスニング)から
アウトプット(スピーキング)へ

重松 靖 (東京都国分寺市立第二中学校)



1. はじめに

「さあ、ミルクの時間ですよ」「おもつを替えましょうね」等々、生まれたばかりの赤ちゃんは家族や周囲の人たちから毎日毎日多くのことばを聞くことを通して母語を習得していく。第二言語習得においても、聞くことなどのインプットを通して言語能力の発達が促進されるということはStephen D. Krashenなど多くの研究者も強調している。

Krashenはその著書 *Principles and Practice in Second Language Acquisition* (Prentice-Hall International, 1981)において、効果的なインプットの条件として次の4点を挙げている (pp.62-73)。

- (1) Optimal input is comprehensible.
- (2) Optimal input is interesting and/or relevant.
- (3) Optimal input is not grammatically sequenced.
- (4) Optimal input must be sufficient quantity.

新しい *NEW CROWN* では、これら4つの視点を大事にしながらインプット(リスニング)を十分に行い、無理なくアウトプット(スピーキング)へ移行できるよう、いろいろな面で工夫されている。入門期とレッスンの題材内容導入という視点から具体的な例を紹介する。

2. 入門期の指導

(1) 本文導入のためのリスニング活動

1年の入門期である LESSON 1～3では、本文の学習に入る前に簡単なリスニング活動を用意している。

この活動には次のような特徴がある。

- ① 基本文を繰り返し聞かせ、耳からの導入・定着を図る。【Optimal input (4)】
- ② 設問は重要ポイントに的を絞った簡単なもので無理なくできる。【Optimal input (1)】
- ③ 本文の内容にスムーズに移行できるよう内容に関連性を持たせている。【Optimal input (2)】

小学校での英語活動が盛んになっているが、本格的に文字に接する生徒は少ないのが現状である。教科書のイラストを助けにしながら、聞くことから本

1年 Lesson 1 Section 1 “I Am Tanaka Kumi”

LESSON 1 I Am Tanaka Kumi

中学校での生活がスタートして、友達たちは自己紹介をしています。

①

トランプがでてくるといってつづきをつけています。あいさつをした順番に数字を()に書いてみよう。

②

例にならって名前を確かめ、みんなの名前を覚えよう。

You are from China. Right?

Yes.

I am Tanaka Kumi. Nice to meet you.

I am Wang Ming. Nice to meet you too.

③

例にならって名前を確かめ、みんなの名前を覚えよう。

You're Miki. Right?

Yes. I'm Kudo Miki.

④

Lesson one I am hello you are from right yes

I'm - I am you're - you are Nice to meet you 很高兴遇见你

Nice to meet you too. 很高兴认识你

Ming 王明's name China 中国

⑤

Right? は聞き手がどうもよくしらないとき、確認しよう。

文の導入をすることは、入門期の生徒たちにとって無理のない活動である。具体例を示す。

6 ページに示した教科書の左ページ上に、導入として「トムが友だちとあいさつをしています。あいさつをした順番に数字を（ ）に書いてみよう。」という指示のあとに、次のような対話を聞く活動がある。

Script

Tom : Hello. I am Tom Adams.

Miki : Hello. I am Kudo Miki. Nice to meet you.

Tom : Nice to meet you too. (以下省略)

教師は CD を聞かせ答えの確認をしたあとに、次のように発話する。

T : (1 人の生徒に向かって) Hello. I am Ito Kenji.

T : (向きをかせ、生徒になったつもりで) Hello.

I am Ide Emi. Nice to meet you.

T : Nice to meet you too.

1 人 2 役で上記のような英語を数名分聞かせたあとに、生徒の部分の発話を促すジェスチャーを行えば、それまでに十分なインプットができていたので生徒も無理なく“Hello. I am Okuda Ryo. Nice to meet you.”と発話できるはずだ。

数名の生徒とやりとりをしたあとに、ペアやグループ内での生徒同士の対話練習へと発展させる。CD→教師のひとり芝居→教師対生徒、といった基本本文の英文を繰り返しインプットされることで理解が深まると同時に、自信を持つことができ、生徒対生徒によるアウトプット（スピーキング）へ無理なく移行できる。

(2) スピーキング活動

教科書右ページ下には、スピーキング活動が用意されている。この活動は次のことに配慮されている。

- ① 口頭で繰り返し使うことによって基礎・基本を定着させる。
- ② そのセクションで学習した重要事項だけを使って会話ができる。
- ③ 楽しく活発に活動できるように工夫されている。

セクションの学習が終わったあとのまとめとして活用することもできるし、音声による基本本文の導入、

教師による説明と簡単なドリルのあとのコミュニケーション活動として活用することもできる。「読む」「書く」といった文字での学習の前に重要事項を音声で運用できるようにしておくことは、入門期の生徒にとってはよいことである。

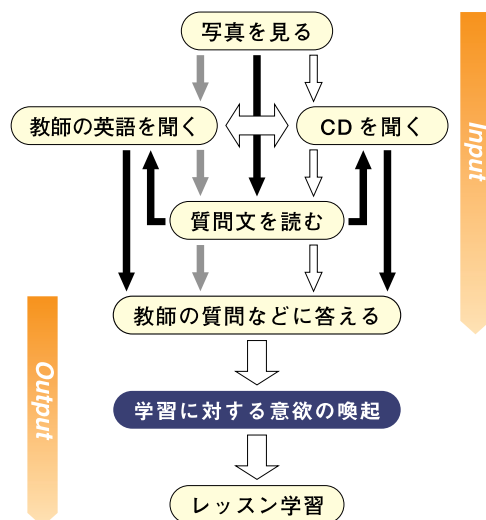
3. プレ活動

今回の NEW CROWN の大きな特徴のひとつは、1 年の LESSON 6 から登場するプレ活動（Pre-activity）である。この活動には次のような特徴がある。

- (1) インパクトのある写真等を使って、レッスンの題材内容を導入し、生徒の学習意欲を高める。
- (2) リスニング音声がついているので、それを使っての導入ができる。
- (3) それぞれのページには、既習文型・語彙を使った簡単な疑問文を配置したり簡単なタスクが設定されており、内容確認ができるとともに、生徒の様々な意見を引き出すことができる。
- (4) 活動時間は 10 分以内。

プレ活動の指導手順はいろいろ考えられるが、主なものを示すと次のようになる。

プレ活動の流れ

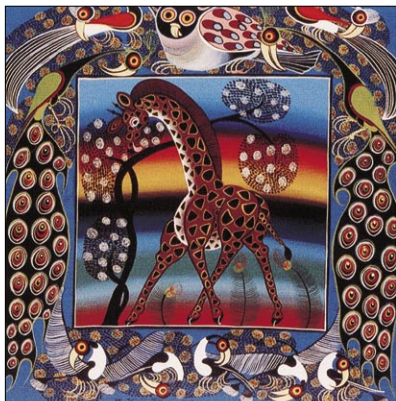


大切なことは、写真などを見ることによる視覚からのインプットと、教師または CD、教師対生徒とのやりとりなどによる聴覚からの英語のインプットを通して、題材に対する関心を高めさせるとともに、

内容を予測させたりスキーマを活性化させることによって「読んでみたい」というさらなるインプット、また「話したい」「答えたい」というアウトプットの欲求を高めさせることである。

具体例を1つ示す。

3年 Lesson 2 “Interview with Ms Kileo”



上の写真を見せ、内容についての予測を立てさせる質問をしたあとにCDを聞かせる。

Script

We see several animals in this picture. We see ten birds. The birds are beautiful, aren't they? And we see a *kirin* in the center of the picture. What's 'kirin' in English? It's 'giraffe'. The giraffe is as tall as the tree.

Think about the animals in the picture. Are they from Asia? No, they aren't. Are they from South America? No, they aren't. They're from Africa. This picture was made by an artist in Africa. Let's learn more about animals' and people's lives in Africa.

次のような質問をしながら内容確認。必要に応じて数回聞かせてもよい。

What do you see in this picture? / How many birds do you see? / Where is this picture from? / How do you say 'kirin' in English? / Which is taller, the *kirin* or the tree? / Who painted this picture?

さらに、次のような質問をしながらアフリカについての関心を高めさせることもしたい。

How many countries are there in Africa? / What countries are there in Africa? / What

animals are there in Africa? / What languages are spoken in Africa?

正答することが目的ではないので、答えを推測させながら多くの生徒に答えさせ、学習に対する動機付けをし、レッスンの学習に入ることになる。

T: We are going to learn about Tanzania. Do you know anything about Tanzania? The most famous painting style in Tanzania is called Tingatinga. This picture is one of them. Let's learn more about the country and people there, shall we?

4. ポスト活動

ブレ活動で示されている写真などはレッスンの題材内容を象徴するようなものが多く、題材内容の深化や発展的な活動にも有効に使うことができる。しかし、題材内容についての十分なインプットが済んでいる段階なので、活動はスピーキングやライティングなどアウトプット中心となる。

以下にいくつかの例を示す。

- (1) 写真を説明するスピーチをしたり書いたりする。
- (2) ニュース番組や新聞という設定で写真を使ってアナウンスしたり記事を書いたりする。アナウンサーと解説者という設定で、Q&A方式でまとめることもできる。
- (3) 写真にタイトルをつける。
- (4) 内容に関連する地域の話題を話したり、書いたりする。
- (5) 感想や印象を発表し合う。その結果をグラフなどにまとめる作業もよい。

5. 終わりに

聞き取れないことは発話できない。アウトプットさせるには、インプットを十分に与え、自信と意欲を持たせること。それが英語教師に課せられた責務であるとともに、醍醐味でもある。インプットは教師やCDの英語を一方向的に聞くだけではない。教師対生徒や生徒同士の対話も立派なインプットになる。*NEW CROWN*を使って授業そのものをダイナミックなコミュニケーションの場にしたい。

特集 英語を使う技能の育成

ことばを使う実感を
持たせる活動

今井 裕之 (兵庫教育大学)



USE IT について

教科書のコミュニケーション活動に何を望むだろうか。文法や構文の定着、それを使った自己表現活動、そしてより自由で即興的な表現活動など、多様な要求があるかと思う。2006（平成18）年度版 *NEW CROWN*（以下、18NC）は、CHECK IT, USE IT, DO IT とそれぞれの目標ごとに活動を分け、生徒も教師もステップアップを実感できるように言語活動がデザインされている。

USE IT は CHECK IT と DO IT の間に位置する活動である。CHECK IT は文法事項の定着を目指したドリル的な発話活動であり、DO IT は LESSON のテーマ、対話の型、言語のはたらきなどを軸に作られた本格的な言語活動である。その両者をつなぐ USE IT は、文字通りことばを「使う」活動であり、「通じた・わかった! という、ことばを使う実感」を生徒に持たせる第一歩の活動と言える。

3年生の LESSON 7 を例に見てみよう。第1セクションの POINT は、Tom wanted me to take pictures. という want 十人十 to do という構文だが、現行版の LET'S COMMUNICATE では、「友だちと対話をしてみよう」という課題を与え、絵の内容に従って、例えば I want you to show me your book. のように、例にならって言わせる活動が3つ続き、最後の4つめで「あなたのしてもらいたいこと」を考えさせ発表させる活動になっている。3つめまでは絵のガイダンスのもと、ドリル的な要素を意図した練習であり、4つめで「自己表現」をさせる、ドリルと自己表現を統合した活動デザインであった。

一方、18NC の USE IT（右コラムの例）では、定着ドリルは、CHECK IT で済ませ、ことばのはた

らきに焦点をあてた自己表現を実感できる活動に集中できるようになっている。指示文によって、ことばを使う状況と課題を与えることで、Ms Shimada wants us to get up at six. のように、「第三者の依頼を伝聞的に伝える」という明確なことばのはたらきを生徒が実感できるよう配慮している。また、起床時間、昼食のプラン、午後の活動、就寝時刻と、日程の説明としての文脈を持たせることで、ともすれば脈絡のないドリルに陥りがちだったものを「話している実感」を持てる活動に仕立てた。

自己表現活動とは、ドリルのあとに、「あとは自分で言いたいことを考えて」と課題を丸投げすることではない。ことばを使う状況やことばのはたらきを生徒が実感・体感できるよう活動をお膳立てすることで、表現の第一歩を踏み出せるようあと押しすることである。

ことばのはたらきや使う状況を実感させる活動を成功させるためには、ことばと1) 誰が、2) 誰に対して、3) どんな意図・目的ではたらきかけているかの3点とのつながりが明快で、それを自然に理解・実感できるようデザインする必要がある。この点について 18NC では、「先生」が「わたしたち」に「依頼、指示する」ことを「留学生に伝える」と

■■■■■ USE IT 7 ■■■■■

1 キャンプで何をやる?

あなたは今キャンプに来ています。黒田先生の話している予定について、例にならって日本語に苦労している留学生の友だちに説明してあげよう。

④ Ms Shimada wants us to get up at six.

今日のスケジュール

- 6 時起床
- 昼食にカレーライスを作る
- 昼食後、公園の清掃
- 10 時就寝

NEGISHI
MASASHISHIGEMATSU
YASUSHIIMAI
HIROYUKIMIKAMI
AKIRATACHIBANA
CHIROIKENO
OSAMU

いった具合に、言語形式とことばのはたらきや状況が自然に馴染むよう改善している。このように各セクションの POINT を、実際にそのことばを使う人、応じる人、場面やはたらきを考え、できるだけ身近で、楽しく、自分のことを知ってもらえる、相手のことがわかる活動を今回のコミュニケーション活動は目指している。

USE IT は意味のある対話・自己表現を目指す

たとえば、過去形を使えるようになると、表現力はグンと増すものだ。一度、現在形のみで同僚と話してみしてほしい。What kind of sports do you like? など個人の嗜好を話したあとは話題が続かなかったり、続けようとする一般論、抽象論になってしまったりしないだろうか。知り合い同士ほど過去の経験を共有したくなるはずだ。初期の学習者も同様で、話しやすい身近な話題ほど過去形は欠かせない。

しかし、過去形で話すためには、センテンスレベルで話すことが要求されるし、私たち自身の経験からもわかるように、過去形 ed は落としてしまいがちである。中学2年生には、相当難しい課題である。だからこそ、CHECK IT の徹底した「型」の訓練が大切なのだが、これは昔のパターンプラクティスへの回帰ではなく、訓練活動とその成果を生かした表現活動 USE IT とを組み合わせることで「言語の型」と「発話の意味」をつなぎ発展させたところに意味がある。CHECK IT と USE IT を分けたのは、各々の目的を明確にするためではあるが、両者は互いを補い合う関係なので、できるかぎりセットで使っていただきたいと思う。

USE IT は自己表現を活動デザインで重視しているが、田中武夫・田中知聡は、『自己表現活動』を取り入れた英語授業』(2003, 大修館書店)のなかで、自己表現意欲を促すポイントとして、1) 必然性、2) 具体性、3) 自己関連性、4) 自由度、の4要素の大切さを強調している。必然性、具体性とは、実際にことばを使う実感に即して言えば、前述の1) 誰が、2) 誰に対して、3) どんな意図・目的ではたらきかけているのか、と同じことで、USE IT でもこれを重視している。自己関連性や自由度は DO IT

との共有課題である。さらに田中らは、生徒の自己表現能力を支える要素として信頼感、感受性、想像力をあげているが、これらは、生徒にインタラクションさせる際に細心の注意を払うポイントである。

インタラクションの際には、ドリルには必要のない「受け手（応じ手）の存在」が大切な役割を果たす。対話の相手から感受性、想像力を刺激され、信頼感を築くことは、コミュニケーションそのものとは言えないだろうか。時々授業では、生徒たちが「言いつばなし」の空振りを強いられるような、受け手のいない言語活動が見られる。パターンとしては、答えの決まった質問を教師に投げかけられ、正解を出すプレッシャーに苦しむ「行き止まり（dead end）パターン」や、自分の発言に対して相手（教師）の応え方がたいてい同じ（Good! などの評価コメント）「壁打ちパターン」があろうか。CHECK IT ならば、壁打ちも、空振り（素振り）も意義はあるのだが、USE IT は、インタラクションを通じて自己表現、大げさでなく「自分を賭けて相手にゆだねる」ことを含む活動であるがゆえ、教師は生きた対話者として生徒を受け止めるべきである。それが活気につながり、なにより受け手の教師自身がコミュニケーションを楽しめる。

自分のことが言えるようになる中学生

今回の改訂で「リズムカルなエクササイズ」と「自己表現につながる活動」を分けたことで、より自己表現に集中して取り組める活動になったと思う。

もちろん私たちは教室での生徒の言語活動を評価しなくてはならないので、「できたか、できていないか」を判断しやすい、答えの決まっているクイズ的活動も取り入れており、すべてが自由な自己表現へと開かれているわけではない。しかし、USE IT が目指す、話し手・応じ手として、ことばを使う実感を大切に、その第一歩を生徒に体感させるという目的は大切にしたいと思う。自分のことが言えるようになるまでには、知識の積み重ね、訓練の積み重ねも必要だが、何よりも、ことばを使えた小さな実感の積み重ねが生徒の息の長い学習を支えるのだと言えないだろうか。

特集 英語を使う技能の育成

こうやってはどうでしょう？ 「話す活動・聞く活動」

見上 晃 (拓殖大学)



話す活動 DO IT - TALK

英作文は英借文というのがある。これは英作文にだけ当てはまるのではない。英会話でも、英語聴解でも真似をするというのは学習の第一歩である。そこで、話す活動ではまず真似をすることを考えよう。

自分の言いたいことを言うためには、教科書の基本文を使った機械的な練習に加えて、基本文を使ったコミュニケーション練習が必要である。さらに場面などに合わせて自分の言いたいことを言う練習が必要となる。この場面に合った練習をするには *NEW CROWN* (以後 NC) の DO IT - TALK が最適である。中学生に必要な場面を網羅した練習ができるようになっているからである。

NC の DO IT - TALK シリーズでは、現行版の NC と同様に、学習する会話が発話者によって右左に分けて書かれている。これは自分の台詞だけを隠して活動を練習するためだが、会話が右左に分かれていることで「会話のキャッチボール」が理解しやすい。

1人で話すのではなく2人が交互に話していく「流れ」があることが理解できる。

TALK 本文の会話を使って練習をするには、まず発音などで問題がないかをチェックするだろう。生徒が家庭で予習する場合に特に注意しなければいけないイントネーションなどの注意はページ下の口のマークの「サウンドアドバイス」

が参考になる。

NC では TALK 本文のポイント文を抜き出して練習できるようになっている。これをマスターすれば最小限の会話知識が身につく。たとえば下の DO IT - TALK 1 を見てみよう。このポイント文は Talking Point に抜き出されている Which do you want, ~ or ... ? である。教科書では ~ や ... の部分に下線が引かれているのでわかりやすい。クラスの3分の1くらいに言わせてみよう。もちろんイントネーションを含めて間違えていたら訂正をする。次に Practice にある既習の単語を使って置きかえ練習ができる。ここでは置きかえる単語が絵で示されているので、意味が理解しやすい。最初は教科書を見ながら順番に置きかえていける。

力のある生徒がいる場合は自前でいくつかの置きかえのできる単語を用意しておくといよい。さらに力のある生徒のためには元の動詞 want の部分を別の動詞に置きかえて使えるものも準備しておくとい

DO IT TALK 1

どちらがよい？

Ken: Welcome back from your trip.

Emma: Thanks. I bought some presents in Australia. Which do you want, the map or the glass?

Ken: The map, please.

Emma: OK. Here you are.

Ken: Thank you.

Talking Point

Emma: Which do you want, the map or the glass?

Ken: The map, please.

Practice

① cup / a glass ② soccer ball / a tennis ball ③ curry / a computer

TRY チャレンジしてみよう

1 キャンプの夕食のメニューをグループで相談します。友だちの意見を聞いてメモをとろう。

メニュー

主菜
カレー (ビーフ/ポーク/チキン)
バーベキュー (ビーフ/ポーク/シーフード)
サラダ
ドミナサラダ
ポテトサラダ
ドリンク
ジュース

※ Which do you like, curry or barbecue?
Ken: I like curry.
Emma: Which curry do you like, beef, pork or chicken?
Ken: I like pork curry.
Emma: Which salad do you like, tomato or potato?
Ken: I like tomato salad.
Emma: Which drink do you like, tea or juice?
Ken: I like juice, please.

名前	主菜	サラダ	ドリンク
Taka	pork curry	tomato salad	juice

※ あなたのグループのみんなはどんなメニューを決めますか。クラスで発表しよう。

② Taka likes pork curry, tomato salad and juice.

WORD BANK

barbecue バーベキュー beef 牛肉 pork 豚肉 chicken 鶏肉
chicken salad チキンサラダ soup スープ tomato トマト potato (じゃがいも)
tea 茶 juice ジュース cola コーラ

い。like で好みを聞いたり watch でテレビ番組を聞いたりすることができる。

聞く活動 DO IT - LISTEN

次に英語聴解であるが、これは全体像をつかんでから詳細に入ることが大事である。NC の DO IT - LISTEN では「全体から詳細へ」が自然に身につくようになっている。また英文の長さも1年から次第に長くなっていくし、聞き取る内容も学年を追って高度になっていくつくりである。自然に易から難のステップで学習できる。

たとえば右の DO IT - LISTEN 4 を見てみよう。教科書は2つのステップに分かれている。

最初の STEP 1 では全体の内容を大づかみにとらえることを目標にする。授業では、まず未習語や、既習であっても耳から聞いて分かりにくい単語や句について説明をする。生徒の実状に合わせて意味と発音を確認しておく。

次に教科書の4枚の写真を見せてどんな単語が使われるか想像させてみよう。リスニングの大きな要素は「予想」である。生徒から単語を1つずつ挙げてもらおうとよいだろう。当然、内容的に近いものが出てくるだろう。それぞれの絵を黒板に張りその下に想像させた単語を書いていく。力のある生徒ならさらにそれらの単語を使って作文させたり、内容について予想をさせたりしてもよい。

それができたら実際に英文を聞いてみる。だいたいどんな内容なのかを何人かの生徒に聞いてみる。また予想した内容と違っているところを聞いてみる。詳細はこれからやるのですべてに答えられなくてもよいし、場合によっては「やまかん」で答えさせてもよい。内容についての意見が出尽くしたら答えを考えてもらう。それぞれの英文がどの絵にあたるのかを聞く。もし生徒の間で答えが違うのであれば、違いをはっきりさせておいて再度英文を聞く。答えは教科書の該当部分に a, b, c, d で記入させる。

次に STEP 2 では詳細を聞き取ることを目標とする。STEP 1 で使った英文の一部を聞かせ、それぞれの質問に答えさせる。[1] は「どんな動植物がそれぞれの場所にいるか」の答えを聞き取らせよう。動物については fox, crane が出てくるのでこれらが

DO IT
LISTEN 4
北海道へようこそ
旅先は友だちのシンディーといっしょに北海道を訪れました。
2人は英語の案内を聞いています。

STEP 1
3つの案内を聞いて、その内容を表す写真を選んで記号で答えよう。

1.

2.

3.

4.

STEP 2

[1] 北海道の動植物についての案内と、そのあとに続く疑問を聞いて、あてはまる答えすべてに○をつけよう。

a. マリモ

b. キタキツネ

c. タンチョウヅル

[2] 博物館についての案内と、そのあとに続く疑問を聞いて、あてはまる答えすべてに○をつけよう。

a. We can eat Ainu food.

b. We can walk through an old house.

c. We can listen to mukuri music.

38 thirty-eight

答えとなる。必要な情報だけを抽出できるようにする。

さらに[2]では「博物館では何ができるか」という問いが用意されている。

ここまでの練習は教科書に従っていけばすべてできるように作られている。

全部の問題が終わったらもう一度細部にわたって聞き取れているか聞いてみよう。たとえば、「まりもの成長についてどう言っているか、すぐ大きくなるか、だんだん大きくなるか」といって実際の英文で聞き取ってもらう、「湖をいつ訪ねるように言っているか」具体的な英文を聞き取ってもらう、などである。できるだけ1つの質問に1回は英文を聞かせるようにする。各質問は何回も英文を聞かせるための手段である。この質問は日本語で与えてかまわない。

生徒に具体的な目標としてある質問をしてその答えを探すために英文を聞く。これが効果的なので、同じ英文を繰り返し聞かせる工夫をすることが大切である。質問をしたりクイズをしったりして何回も聞かせる方法を考えてはどうだろうか。耳に音が残るほど聞けば、同じような内容の聞き取りが容易になると思われる。NCのDO ITを使って簡単に効果的な授業を組み立ててみてはいかがだろうか。

特集 英語を使う技能の育成

言語活動を広げる
「選択的な扱い」

立花 千尋 (神戸大学発達科学部附属住吉中学校)



1. はじめに

学習指導要領に定めている語彙数や言語材料が削減され、学力低下が叫ばれているなか、文部科学省はその対応策として、「学習指導要領は指導内容の最低基準を示すものである」と発表した。そして選択的な学習を配置したねらいは、1つには、その学力低下への対応策であり、もう1つには、言語学習の主要な目的である英語による自己表現力や英語運用力などの、いわゆる実践的コミュニケーション能力を育成するためである。

2006(平成18)年度版 *NEW CROWN* の教科書には、今回の改訂の特長として、「個に応じた指導」に対応する選択的な学習のパートを新たに配置している。DO IT (TALK, LISTEN, WRITE) の TRY と、語句・表現の補充としての WORD BANK、選択的な読みものとしての READING PLUS がそれにあたる。

ここでは、DO IT の TRY を中心に紹介しながら、その趣旨やねらいを示してみたい。

2. 新たに加わった TRY のねらい

TRY のねらいは、基礎的な既習事項をさらに深め、自分の思いや考えを、英語で積極的に表現できるようにさせることである。TRY の構成の趣旨は次のようになっている。

- ① よりインタラクティブな活動になっている。
- ② 生徒が自分の視点に引き寄せて表現できる内容になっている。
- ③ 書く・読むなど、他の技能と組み合わせた活動も入っている。

またレッスンから自然に流れるように、本課の内容と緩やかな関連性を持たせているのが今回の改訂

の特長である。

3. 具体的な TRY の展開と趣旨

(1) DO IT - TALK の TRY

ここでは、Talking Point の基本表現をしっかり練習させ、基礎・基本の定着がはかられたあと、いよいよ TRY にチャレンジさせる。練習したことが運用力につながる事が大切なので、言語練習から言語運用へリンクさせ、段階的な練習ができるように構成されている。そして、段階が進むにつれて生徒の英語による自己表現の場を増やしていくような言語活動がデザインされている。しかしその場合、生徒が自己表現をするための単語や語句のサポートが必要であり、活動の際に参考となる語句や表現の入った WORD BANK がその役割を果たしている。

TALK (TRY) の展開<2年の場合>

DO IT - TALK 2 (本誌14ページ参照)

「どうやって使いますか? 方法をたずねるとき」

TRY の進め方であるが、3段階の構成になっている。

第1段階では、AとBのペアによる対話例文に従って、指示された部分を生徒自身のことばに置きかえて対話練習をする。

<対話例文>

A: I often go to my grandmother's house in summer.

B: Where is it?

A: It's in Nagasaki.

B: How do you go there?

A: I go there by plane and bus.

WORD BANK には、by train, by car など、下線

部にかわる表現が示されている。これを生徒が参考にすれば表現に広がりが出てくる。

第2段階では、相手をかえてできるだけ多くの相手と対話練習をさせることによって、Talking Pointの英文の理解と定着をはかると同時に、相手から新たな単語や表現を学ぶ機会を得ることができる。

第3段階では、対話で相手から得た情報をクラスの仲間に発表することによって、情報を整理して自分のことばで伝える機会になる。

このように、聞いたり話したりした内容を書くことによってライティング能力を育成することができ、4技能の統合された英語力が身につくように構成されている。

(2) DO IT - LISTEN の TRY

ここでは、「聞く」技能が自然に身につくようにすることがならいであり、場面設定や活動の内容を実生活でもありうるようなものにしている。DO IT - LISTEN の活動にさらに TRY を加え、とても充実した「聞く」活動ができるようになっている。

LISTEN (TRY) の展開<1年の場合>

DO IT - LISTEN 4 「文化祭で」(右上ページ参照)

DO IT - LISTEN の STEP 1, 2 の聞き取り(話題: 文化祭 / 言語材料: 進行形)が終わったあとで、TRY の活動に移る。LESSON では言語材料として現在進行形を導入し、米国の中学生の日常生活について紹介しているので、TRY でも同じく現在進行形を用いて日常生活の話題を扱っている。

第1段階は「聞く」技能の活動であり、それぞれの人が「何をしているか」キーワードを聞き取ってメモをする。

Talking Point 話の要点

Rafu: How do you use a furoshiki?
 Men: We carry things in it.

Practice 練習

eat sushi make an omigiri write reports go to Okinawa
 use furoshiki make it by hand use a computer go by plane

TRY チャレンジしてみよう

1 ペアを作り、AさんとBさんになって会話しよう。
 Aさん: あなたがよく行く場所について、例にならって載せてあげよう。
 Bさん: Aさんがよく行く場所とその行き方について質問し、内容をメモにとろう。
 A(Taku): I often go to my grandmother's house in summer.
 B: Where is it?
 A: It's in Nagasaki.
 B: How do you go there?
 A: I go there by plane and bus.

2 ペアを変えて、できるだけたくさんの方と友達に質問しよう。

名前	行き先	行き方
Taku	grandmother's house in Nagasaki	by plane and bus

3 友だちはどんな場所にいますが、クラスで発表しよう。
 Taku goes to his grandmother's house in Nagasaki.
 He goes there by plane and bus.

WORD BANK

by train 列車で by bus バスで by car 車で by bike 自転車
 by ship 船で on foot 歩いて walk to the park 公園に歩いていく

nineteen 19

TRY チャレンジしてみよう

ジャックが休日の家族の様子をビデオで撮影しています。

1 ビデオの音声聞いて、ジャックの家族がそれぞれ何をしているか、メモにとろう。

2 もう一度聞いて、下欄に単語を書き入れよう。

My brother is running over there.
 My father and Peoch
 My sister the
 My mother

3 休日の家族や友だちの様子を想像して、その様子を伝える文章を書こう。書いたらクラスで発表しよう。

Hello, everyone. I'm . Today is Sunday.

seventy-five 75

第2段階は「聞く」技能と「書く」技能の統合的な活動になっている。もう一度、同じ音声聞いて、空欄に英語を記入する。

第3段階は「書く」技能と「話す」技能の統合的な活動になっている。2で聞き取った英文を参考にして、自分自身の休日の様子について英文を書き、クラスで発表する。

このように、「聞く」から「書く」、さらに「書く」から「読む」、そして「話す」活動へと展開している。

(3) DO IT - WRITE の TRY

WRITEについては、現行版のNEW CROWNでも行ってきたプロセス・ライティングの手法を用いている。詳細は次の「書く力を伸ばす」の稿に委ねるが、DO IT - WRITE でも TRY の最後で、それぞれが作成した個性的な英文をクラスで発表させ、「書く」から「話す」活動が設定されている。

4. おわりに

選択的な活動である TRY や WORD BANK を足がかりに、さらに実際に生徒が用いた単語や表現を蓄積させていけば、より一層生徒の表現を豊かにしていくことが可能である。生徒自身のことばで表現できたという実感の積み重ねが、学習意欲と自信につながっていくのではないだろうか。

特集 英語を使う技能の育成

書く力を伸ばす
—THINK ABOUT IT, WRITEについて

池野 修 (愛媛大学)



NEW CROWNの中で「書く」ということに深く関連した活動が THINK ABOUT IT と WRITE です。THINK ABOUT IT は、教科書レッスンの内容を利用して、自分の考えを書いて表現することに少しずつ慣れる、また WRITE は、まとまった時間を使って、しっかりした内容の英語メッセージを作成する、というねらいを持った活動です。

1. THINK ABOUT IT について：

4 技能プラス1 = 「考える」

THINK ABOUT IT は、レッスンの内容を振り返り、レッスン内容に対する自分の感想や意見を話したり書いたりする、「考える」活動です。この活動には次の3つのねらい・意義があります。

- ① レッソンのテーマや題材の内容について「考える」ことを奨励します。NEW CROWNにはインパクトのある題材、生徒の感性に働きかけたり、思考を促したりする題材が多く含まれています。THINK ABOUT IT は、レッスンで扱われたテーマに関連して、生徒が感じたこと・考えたことを深化させ、表現させることをねらいとしたコーナーです。
- ② レッスンで学んだ事柄の振り返りを促し、学習した言語材料の定着をより確かなものにすることができます。これは、THINK ABOUT IT が学んだレッスン全体をもう一度読み返さなければ出来ないように作成されているからです。
- ③ 「書く」活動の補充になります。レッスン本文のパートでは、「読む」「聞く」「話す」が中心になりますが、相対的に少なくなる傾向にある「書く」(単に文字を書く・英文を写すのではなく、自分でメッセージを作って英文で表現する)活動をこの THINK ABOUT IT でも行うことができます。

一例として、2年生の LESSON 3: At the Zoo を見てみましょう。このレッスンは動物園で見たスマトラトラを手がかりに、世界で絶滅に瀕している種について考える内容ですが、課末の THINK ABOUT IT は、本文を参考にして、自分たちが動物を救うために「できること」や「やらなければならないこと」は何かを考え、We can ..., We must ... を使って述べる、という活動になっています。このような課題を行うことで、レッスンで学んだ内容をもう一度吟味するとともに、can や must といった助動詞が、単なる習得すべき文法事項としてではなく、自分が考えたメッセージを表現する媒体として意味を持てきます。

NEW CROWNには中学で学ぶ生徒にとって意味の大きい題材が多く含まれています。優れた題材に触れると、心が動き、伝えたい・書きたいという気持ちになります。THINK ABOUT IT は、この気持ちをうまく利用して自己表現に発展させることを目指しています。

よく、英語は「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能からなると言われますが、「人間教育の一環として行う英語教育」という視点に基づき、NEW CROWNではこれに5番目の要素「考える」を付け加えて教科書を作成しています。いかにうまく英語が話せるか・書けるかだけではなく、「何を伝えるか」、つまり伝達内容やメッセージを重視する、英語の「習得(定着)」だけではなく、それに基づいた「思考」や「表現」にも重きをおく——これは NEW CROWN がずっと大切にしてきた方針です。

2. WRITE について

WRITE は、文字通り「書く」活動です。このラ

イティング活動は、各学年で2回ずつ、集中的に行えるように *NEW CROWN* は編集されています。中学校では英語を話す・聞く活動に重点が置かれるのは確かですが、自分の考えや思いを書いて表現するという活動も、伝えたい内容を論理的に整理したり、考えを深めたりする意味で大変重要なものです。また、これからの時代は、英文メールの交換など、英語を書いてコ

ミュニケーションを行う機会も増えてくると考えられ、中学校でその基礎能力を養っておくことが必要です。

WRITE には次のような特徴があります。

① まず、現実的な言語使用場面を設定することで、生徒にとって活動の意義が感じやすいライティング活動になっています。*NEW CROWN* で取り上げている WRITE のテーマをいくつか見てみると、「カードを書こう—休み中のできごとについて書く」、「将来の夢は日本語教師です—将来つきたい仕事について書く」、「ホストファミリーへのEメール—問い合わせのEメールを書く」、「いちばんの思い出—3年間の忘れられない人（こと）について書く」などのようになっています。英文手紙や英文メールを扱った WRITE は、生徒が将来実際に会おうであろう言語使用場面を設定して行う活動になっています。このようにすることで、生徒にとっても書く活動の意義や自分の将来のニーズへの関連性が見えやすくなり、活動への意欲が高まります。また、夏休み明けや中学校最後の時期など、自分が体験してきたことを振り返ったり、思い出をまとめたりするのにふさわしい時期に、関連する WRITE の活動が用意されています。

② 書くプロセスを3段階に分けて丁寧に指導ができるように工夫がされています。

STEP 1 モデル文を参考にして、書く内容を考えます。このステップでは3つの質問が提示されており、

それらに答えていくことで、自然に書く内容を作ることができる、考えた内容を整理することができるようになっています。

STEP 2 モデル文の該当箇所を自分のことに置きかえて英文を書きます。型が決まっている部分なので、英語が苦手な生徒でも比較的スムーズに英文を書くことができるようになっています。

STEP 3 「TRY—チャレンジしてみよう」と名づけられたステップで、STEP 1 と STEP 2 をベースに、まとまりのある英文メッセージ（多くはスピーチ）を作り、それを発表します。STEP 2 で作った部分に自分なりの英文を加えることで、オリジナルのメッセージを作ります。

このように書くという活動を細分化することで、生徒は最終的なゴールとそれに至るステップのサブ・ゴールを明確に意識しながら、段階的に英文を作っていくことができます。

このように、*NEW CROWN* は、THINK ABOUT IT と WRITE というコーナーを設けることで、(1) 学習した言語材料のさらなる定着を図る、(2) 題材に関連する内容について、考えの深まりを促す、(3) 文字による実践的コミュニケーション能力の基礎を養う、(4) 英語で書くことによって、豊かな自己表現体験を持たせる、などの目標の達成を目指し、効果が大きくなるように様々な工夫を凝らして活動をデザインしています。